
瑞穂の日常『おじいちゃん』

九条 樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

瑞穂の日常『おじいちゃん』

【Nコード】

N7910R

【作者名】

九条 樹

【あらすじ】

高校3年の桜井瑞穂。瑞穂の周りには両親を筆頭に個性的な人がいっぱい。その個性的な人達に振り回される瑞穂の日常生活をコメディタッチで書いたシリーズものです。

今回はおじいちゃん編です。

このシリーズは、東北地方太平洋沖地震によって被災した方の心を少しでも励まそう、ということで企画された「Smile Japan」への投稿作品です。これを読んで被災地の方が少しでも元気の出る手助けになれば幸いです。

「失礼するよ」

そう言つて私は室内を見渡す。

3つのベッドにそれぞれ3人の男性が寝ている。

お年寄りの男性が1名、中年の小太りの男性が1名、まだ20代と若い男性が1名。

「それでは……」

そう言いながらおもむろにお年寄りの男性の傍らに立ち顔を覗き込む。

「ご気分はどうですか？」

私に声をかけられた年寄りは顔をしかめながらも一言「大丈夫です」と答える。

「それは良かった、何かありましたら遠慮なく連絡してください。そのボタンを押して頂ければすぐに看護師がまいりますので」

お年寄りはまだ怪訝そうな顔のまま「はい」と返事をした。

こう言つてはなんだが、せっかく診に来てやつてるのに感謝のかけらも感じさせない態度だ。

まあ年寄りというものはこんなものか。そう思いなおし、今度は若い20代の男性の前に立つ。

「どうですか？ なにか不便はありませんか？」

若い男性は私の問いかけに反応せず、ベッドの頭元にある棚からトランプを出していきなり1人でババ抜きを始める。

「1人でトランプをして楽しいですか？」

その問いにやっと私を見たかと思うとにやあゝと笑つて小さな奇声を発する。

これだからここは嫌なんだよ。

隣を見ると中年の小太りの男は携帯電話で話をしている。

病院内ではもちろん携帯電話の使用は禁止だが、その男の持つて

いる携帯電話はおもちゃである。

先ほどからそのおもちゃの携帯電話が、さも繋がっているかのようには話をしている。

話の内容は自分の名前に始まり、年齢、職業、家族構成、そしてどうして今ここで入院しているかという話を話している。

そして一通り話し終えたと一旦電話を切る。はじめから繋がっていないので切るといっのはおかしいが、本人は切ったつもりでいる。そしてまたおもちゃのボタンを押し、コール音もないのだがしばらくして「もしもし、俺だ、俺は……」と自己紹介から始まる。そしてそれをエンドレスに続けている。

こういう人達を集めた病棟なので仕方ないが、いい加減うんざりしてきて病室を出ようとした時、先ほどのトランプ男が私の腕を掴む。

私はその手を振りほどこうとしたがさすがに若いだけあって力が強い。

「離しなさい」

そう言っても全く離そうとせず、わけのわからない言葉を発しながらお年寄りを指さす。

私には若者が何を言っているのか分からないが、お年寄りには若者に反応してナースコールを押した。

「まったくなんなんだお前たちは」

私は怒気を込めて言い放つ。

しかし若者の手はしっかり私の腕を掴んだままだ。

しばらくして看護師と一緒に高校生くらいの若い女性がやってきた。

制服を着ているので女子高生で間違いないだろう。

そっぴいええ見覚えのある女性だ。

「おじいちゃん！こんなところで何をしてるの！」

女子高生が私に向かって叫んでる。

そっだ、この女性は私の娘だ。

「いや、私はここの患者を診ようと思ってだな……」

「中原さん、患者さんの診察はお医者様がちゃんとしますから、中原さんは病室に戻ってください」

「私の病室？なんで私が？」

「もう、おじいちゃんつたら…… 看護師さん、ご迷惑かけてごめんなさい」

どうして娘が看護師に謝っている？

「いえいえ、どこに行っちゃったか心配してましたけど見つかったよかったです」

「おじいちゃん、病室から出ちゃダメって何度言えば分かるのよ」

これは確かに私の娘だ。だが娘は私を病人の誰かと勘違いしてるんだろう。

「私は医者だ！仕事のじゃまをするな」

「何言ってるのよ、おじいちゃんは患者でしょ。あんまりみんなに迷惑かけないの」

そう言って私の腕を引っ張り病室の外に出て廊下を歩く。

「まて、私は診察が残ってるんだ」

「まだ言ってる。じゃ、おじいちゃん名前は何ていうの？ちゃんと言える？」

何を馬鹿な質問を…… 自分の名前を答えられないやつがいるのか？

「私の名前は…… 私は…… 誰だ？」

「あんまり徘徊ばかりするようだと病室に鍵を掛けなくちゃいけないよ」

「美佐子まってくれ、鍵を掛けるのはやめてくれ」

「私は瑞穂。美佐子はお母さんで、おじいちゃんの娘でしょ」

「そうか！お前は中原瑞穂。ワシの孫じゃ」

「そうよ。やっと思いだしてくれた？」

中原はお母さんの旧姓で、私は桜井瑞穂なんだけど、面倒なんでそのまま流すことにした。

「思いだすも何も初めからちゃんと分ってたわ」

「そうね。じゃ、とにかくそのベッドに横になって……」

「瑞穂。今日お父さんのところ行ってくれたんでしょ？」

「うん」

「ほんと呆けちゃって嫌ね〜」

嫌ねえ〜って…… あんたの父親でしょ！

とりあえず私は今日の病院での出来事を話す。

「そう、そんな楽しい事があったんだ。私も行けばよかった」

何が行けばよかったよ。

おじいちゃんの呆けが酷くなってからは、全然見舞いに行こうとしないくせに。

「瑞穂がママに見舞いに行ってくれて助かるわ〜」

助かるって…… お母さんが全然行こうとしないからでしょ！

どうしたらそんな自分の都合の良い思考にばかりなるのよ。まったくもう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7910r/>

瑞穂の日常『おじいちゃん』

2011年3月28日08時43分発行